絶対の正義

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

絶対の正義

【Ｎコード】

Ｎ５１４５Ｉ

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

岩清水はとある些細なことからかつてのいじめによる自殺事件におけるいじめっ子達の手懸かりを掴んだ。いじめ糾弾サイトを持っている彼は同志達を集め凄惨な糾弾を開始する。いじめを扱った作品です。主人公のやり方が正しいか間違っているかはよく御覧になって考えて下さい。

第一章

絶対の正義

最初に気付いたのは実に些細なことであった。
新入社員の交友を深める為の飲み会でのことだった。居酒屋に集まった一同はそれぞれ自己紹介をするのだった。それは男女一緒であった。
「それじゃあ次は」
「俺かな」
程よく上がった短い眉に横を短くした量の多さが目立つ黒い髪を持つ小さな目の青年だった。背はわりかし大きい。その彼の番になったのだ。
「ええと、俺はね」
「小笠原君だったっけ」
「そうだよ、小笠原祐次」
同じく新人のＯＬの問いに対してこう名乗るのだった。声は朗々としたものである。
「総務部に配属になったんだ、宜しく」
「総務部なんだ」
「うん、何かあったら何時でも読んで」
明るい顔で述べた言葉だった。
「何でもやらせてもらうから」
「趣味は？」
「ゴルフとテニス」
実に明るい趣味であった。スポーツマンなのはその雰囲気からもある程度わかるものだった。
「後は音楽はロックかな」
「出身は？」
「東京だよ」

つまりここだというのである。
「大学は早稲田でね。文学部だったんだ」
「文学部なの」
「太宰治を研究していてね」
こう気さくに話していくのだった。明るく屈託のない様子で。居酒屋の中での歓迎会は実に雰囲気よく進んでいた。
「人間失格とかね」
「文学にも詳しいんだな」
「そうでもないよ」
同期の言葉に少し笑って謙遜の言葉も述べた。
「別にさ」
「それで高校は？」
一人の何気ない質問だった。しかしこれが異変のはじまりだった。小笠原はまずはその言葉を詰まらせてしまった。一瞬だったが身動きも止めた。そうしてそれから何か考える目をしてからそれまでとはうって変わって小さな声で答えるのだった。
「修和高校だよ」
「おいおい、すげえな」
「超進学校じゃない」
この学校は都内でも有数の私立進学校である。男子校でありその校則も厳しく軍隊の様だとも言われている学校である。その校名を聞いて皆言うのだった。
「それもお金持ちの行く」
「凄いところ出てるのね」
「ま、まあね」
ここでやっと自慢らしきものを見せてきた小笠原だった。
「そうか。こりゃ出世頭かな」
「頼りにしてるわね」
皆その彼に対して次々に声をかけるのだった。
「これからね」

「頼んだぜ」
「うん。こちらこそ」
このやり取りは何処にでもあるやり取りだった。しかしであった。その同期の中で小笠原の一連の様子にいぶかしむものを感じた者がいた。それが岩清水健一郎であった。
眼鏡をかけた痩せた男である。黒い髪は無造作であり目の光はいささか神経質なものがある。その彼もまたこの会社の新入社員だったのである。
それでこの同期同士での親睦を深める飲み会に出ていたが彼はここでは地味な存在であった。しかし小笠原のこの言葉を聞き逃さなかったのである。
「修和高校か」
まずはここに引っ掛かるものを感じたのである。この学校が進学校であることは彼もよく知っていた。そしてその他のこともである。
その良家の子弟という子供達が通う学校であるのも知っていた。そして男子校であることもだ。だが彼が知っているのはそれだけではなかった。
数年前だった。この学校で生徒の自殺事件があったのである。その時は話題になったがやがて忘れ去られていった事件である。
この事件のことを思い出したのである。そしてその事件の中身も。彼はいじめ事件を扱っているサイトを開設していた。そこではいじめに関する様々な細かいデータや事件が掲載されており彼はそこでいじめを糾弾していた。その自分が載せているその事件をもう一度調べたのである。
するとだった。その自殺があった年がわかった。そしてその学年もだった。自殺事件があったのは今から七年前で岩清水が高校一年の時だ。その自殺した生徒も高校一年生だったのだ。
「同じ学年だったのか」
そのことをあらためて思い出した彼だった。何しろ自分のサイトに掲載してあるそのデータがかなりの量なので忘れてしまっていた

のだ。

第二章

「だとすると」
ここで、だった。小笠原のことを思い出したのである。彼は修和の名前が出たところで一瞬表情を暗くさせた。それは何故かと考えたのだ。
「この事件は確か」
自宅で自分のパソコンを見る。そこにはっきりと同じクラスの中でいじめがあったと書かれていた。それを苦にしての自殺だと。書かれていたのである。
そこまでわかればだった。彼はさらに深く調べることにした。それと共に自分のサイトでこの事件に関する情報を募集しさらにもう一つのことについても募集をはじめた。そのうえで身元がわからないようにしたうえでサーバー等足元がつきそうなものを日本の警察やそういった機関の手が及ばない外国に移したのだった。まずはそういったことを行ったのだった。
そのうえで修和高校に身分を偽って入った。今度受験する中学生の兄という触れ込みでだ。名刺も偽造してそのうえで入ったのだった。
出て来たのは若い爽やかな顔立ちの男の先生であった。白く渡り廊下に円柱がある西洋の宮殿を思わせる立派な造りの学校の中でその若い先生と会ったのである。
「はじめまして」
「どうも。お話は聞いてます」
その先生は明るい声で問うてきたのだった。
「この学校の教師の古館です」
「古館さんですか」
「今年この学校に赴任したばかりです」
こう彼に答えるのだった。

「理科を教えていまして」
「理科をですか」
「ええ。あらためてこの学校に戻って来たのです」
岩清水に対してこう言ってしまったのは彼の一生の過ちであった。だがそのことには全く気付いていなかった。それも全くである。
「懐かしいですね」
「懐かしいですか」
「はい、とても」
暖かい目での言葉だった。言いながら学校を見回す。そのうえでまた言うのだった。
「この学校で三年間学んでいまして」
「それで学校を出られてですね」
「はい、そうです。大学で教職課程を経てです」
そしてこの学校の教師になったというのである。
「そのうえで学校に戻って来ました」
「ではこの学校のことは」
「よく知っています」
その目は暖かい。岩清水が見ても学校の中は実に奇麗なものである。その白い宮殿を思わせる造りの校舎だけではない。緑の木々も実に美しい。色とりどりの花達まで咲き誇っている。白い学生服の襟と袖のところが奇麗なブルーで彩られている。それがまた美しかった。汚らわしいものは何も見えなかった。そう、見た目には。
「隅から隅まで」
「そこまでですか」
「先生達も知っている人達ばかりですしね」
学園の教師陣も知っているというのである。
「どなたも」
「そうですか」
「はい。それでですが」
ここまで言ったうえで身分も名前も偽っている岩清水に対して問

うのだった。
「学校のどういったことをお知りになられたいのですか？」
「まずは校内をですね」
事前に調べていることは隠して彼に答える岩清水だった。
「見て回りたいのですが」
「はい、それでしたら」
彼のその言葉を聞いて穏やかに微笑んでみせた古館だった。そうしてそのうえで彼と共に校内を回るのだった。
校内も実に美しかった。クラスの中も廊下もである。何処も奇麗に掃除されまた装飾も見事であった。中もまた宮殿の様であった。
グラウンドも広く見事である。そしてプールも。しかし時折そうした場所を見回る古館の顔が微妙に強張った。そしてそれは体育館に入った時にかなり強いものになった。
「ここがですね」
「体育館ですね」
「あっ、はい」
岩清水の言葉にぎょっとした顔になって返してきたのだった。
「その通りです」
「ここでも体育や部活が行われるのですね」
「そうです」
ぎょっとした顔は強張っていた。その顔でまた岩清水に応えたのである。
「その通りです」
「わかりました。それでは体育倉庫は」
実はそこで自殺が行われたのを知っている岩清水だった。しかしそれは隠してあえて何も知らない風を装って古館に対して言うのである。

第三章

「どちらでしょうか」
「そ、それはですね」
明らかに声が震えている古館であった。
「あちらです」
「そうですか。あちらですか」
「そ、そうです」
声は震えたままであった。
「体育館の奥で」
「ああ、あそこですね」
わざと古館がそこを見るように入口から見える体育館の奥の方の扉を指差してみせた。木とテープの体育館の床の奥にその木製の左右に開く扉があった。
「あそこですね」
「そうです。あそこです」
「そういえばですね」
ここでまた言ってみせる岩清水であった。
「今体育館に先生は」
「斉藤先生ですか！？」
「斉藤先生とは？」
「あっ、いやあれです」
自分の言葉に気付いて慌てて訂正する古館であった。
「この学校の教頭先生でして」
「教頭先生ですか」
「私が一年の時体育の先生だったんですよ。学年主任で」
彼は何かを隠す様に必死に話していくのだった。
「いや、いつも頑張ってましてね」
「そうだったんですか。目立つ先生だったんですね」

「はい。それでですけれど」
岩清水はあえて表情を消している。そのうえで冷静に話を聞いているふりをしていた。その顔は能面の様であったが実はその裏で古館の言葉を読んでいるのだった。
「今度はですね」
「どちらへ？」
「ええとですね」
「ああ、そうですね」
ここで岩清水はヤマをかけることにしたのだった。そうしてこう言ってみせたのであった。
「庭園に行きたいですね」
「庭園ですか」
「はい、そこです」
そこだというのである。実は彼は事前にこの学園の地図は調べていた。そうしてそのうえで彼に対して言ってみせたのである。
「そこに行きたいのですが」
「庭園ですか」
それを聞いた古館はさらに困惑した顔になっていた。顔には汗まで流れている。そこまで暑くはないというのにである。
「そこにですか」
「ええ、そこにです」
「わかりました」
暫く考えたが喉をごくりと鳴らした後で。頷いた彼であった。
「ではそちらに」
「はい」
こうして二人はその庭園に向かった。そこは小道がありまた緑が豊かであった。木々も高く人が完全に隠れる程であった。しかもそこには和風の茶室まであった。
「茶室もあるのですか」
「いいでしょう」

学校の中に茶室がある学校というのはかなりのものだ。自慢すべきものであろう。しかし古館の顔は何故か微かに引き攣っていた。岩清水はそれに気付かないふりをして言うのであった。

「ここもまた我が学園の自慢の場所なのですよ」

「そうなのですか」

「はい、私も学生時代よくここを歩きました」

「いい場所ですね」

岩清水は目で左右を見回しながらまずはこう述べた。

そうして、であった。ここでこうも言ってみせたのであった。

「ただ」

「ただ？」

「色々と隠せる場所みたいですね」

何気なくを装っての言葉であった。

「ここは」

「隠せるとは？」

「いえ、例えばですよ」

これは駆け引きであった。古館に対して事前に何も知らせずに仕掛けた駆け引きであった。だからこそ確実に成功するものであった。それを仕掛けてみせたのである。

第四章

「悪事を働いても容易に隠せそうですね」
「悪事ですか」
「そうですね。リンチとか」
言いながらちらりと横に並んでいる古館の方を見る。するとだった。
まるで蛇に睨まれた蛙の様になっていた。実際には目の前にそんなものは全くないのにだ。そうした顔になってしまっていたのである。
「そうしたこととかは」
「そ、そうですかね」
古館は震える声で彼に対して応えたのだった。
「そう思われますか」
「私の気のせいでしょうか」
「だと思いますよ」
何とかその声を冷静なものに戻しながらの返答であった。
「私は」
「だといいのですけれどね」
「ええ。それで後は」
「あっ、何もありません」
これで終わりだというのだった。
「では今日は有り難うございました」
「それではお見送りさせてもらいます」
「はい、それでは」
こうして彼は学園の内部を一旦一通り見終えたのだった。その時に実は服の胸のところに密かに備えさせていた隠しカメラを始終動かしていた。しかしそれもまた内密であった。
校門を出る時学校の駐車場を通り掛った。そこで白い奇麗な乗用

車を見たのだった。それは明らかに日本の車ではなかった。それはであった。
「セフィーロですか」
「あっ、私の車です」
ここで古館の顔に笑顔が戻ったのだった。
「私の宝物なのですよ」
「そうですか。大事なものなのですね」
「命みたいなものですね」
満面の穏やかな笑顔での言葉であった。
「大学時代ずっと苦労してお金を貯めて買ったもので」
「そうなのですか」
「それで隣のラファーガが教頭先生のです」
ここでまた彼は言ってしまった。しかしやはりそのことに気付いていないのだった。
「あの黒いのがです」
「わかりました」
ここで密かにまた隠しカメラを動かした岩清水であった。
「どちらもいい車ですね」
「有り難うございます」
「それでは。そうだ」
ここで彼は去ろうとしたところでふと思い出した素振りで。古館に対して振り返ってそのうえで尋ねたのであった。
「一つお伺いしたいことが残っていました」
「はい。何ですか？」
「弟がこの学校に入ったならそのクラスになるかも知れないので」
やはり何も知らない素振りの言葉であった。
「御聞きしたいことがあります」
「何ですか？」
「先生はどのクラスにおられましたか？」
このことを尋ねるのだった。

「一年の時は何組におられましたか？」
「何組ですか」
「はい、何組に」
ただ尋ねただけといった素振りを演じている。しかしそれに対してクラスを聞かれた彼はまたしても顔を強張らせているのだった。
「おられましたか」
「それはですね」
暫し目を伏せ逡巡を見せた。しかしそれを止めてそのうえで答えてきたのだった。
「二組でした」
「一年二組でしたか」
「はい、そこでした」
強張り緊張した面持ちでの言葉であった。
「そのクラスでした」
「わかりました」
穏やかな顔で頷いてみせた岩清水であった。
「有り難うございます。それでは」
「はい、これで」
こう言葉を交えさせ別れの挨拶をして学校を後にする。しかし彼はこの日彼と話したこと、そして見たものを全て頭の中にインプットさせていた。そのうえ写真も撮っていた。
そうしてであった。サイトに寄せられて来る情報を確かめてそのうえで既に掲載されていたデータを観直す。そこには自殺した生徒のクラスまで載せられていた。

第五章

「そうか。二組か」
そう、その二組であった。間違いなかった。
「それに教師の体罰も噂されているのか」
これは寄せられた情報からであった。
「あの先生も二組だったな。それでか」
古館がしきりに表情を強張らせていた理由も察した。そして体育館の倉庫は。
「その生徒が自殺した場所だったな」
このこともチェックしているのだった。
「ここまではわかった」
彼はチェックし終えてから一人で述べた。
そうしてであった。次の日彼は何気なく会社の総務部を訪れた。白く奇麗な部屋の中に机が向かい合って座っている。その向かい合う机のところに部長や課長の席もある。そして小笠原もそこにいた。
だが彼は小笠原には一瞥しただけだった。同期としてのにこやかな挨拶は交えたがそれだけであった。そうしてそのうえでこう総務部のＯＬの一人に対して告げるのだった。
「二組下さい」
ここをあえて『にくみ』と言ってみせたのである。小笠原に聞こえるようにして。
「二組。ノートのセットを」
「はい、どうぞ」
そのＯＬは何も考えずにそのままノートを手渡した。しかしであった。
岩清水は小笠原を見ていた。彼は『にくみ』と聞いてその顔を青くさせた。一瞬であるが青くさせた。そして岩清水はそれを見逃さなかった。

（やっぱりな）
彼はそれを見て確信したのだった。
（関わっているのは間違いない）
彼は小笠原がいじめに関わっていたと断定した。その二組において。しかし彼はまだ動かなかった。彼は家に帰るとすぐにパソコンの電源を入れた。そうして己のサイトとメールボックスをチェックした。
するとだった。そこには多くのメールが届いていた。彼のサイトへの情報提供である。それがかなりの数で届いているのだった。
様々な事件に関するメールが届いていた。そして彼が今最も力を入れているその事件についても。それがとりわけ多くなっていた。
「成程。いじめだけじゃないんだな」
彼はこのこともわかったのだった。
「何、この情報提供者は」
ここで一人のメールに気付いたのだった。その情報提供者は。
「そうか。当時修和高校にいた生徒だったのか」
彼が最も欲していた情報提供者であった。その人からのメールだったのだ。
そこには体罰があったとも書かれていた。体育教師からの体罰だと。ただし今は名前ははっきりとは書かれてはいなかった。
彼は送られてきたメールにはこちらから返信できるように設定していた。そしてその彼に対してさらに情報を提供してくれるように頼んだのだった。
とりあえず今までわかったことをサイトに載せた。体罰もあったらしいということに。この日はこれで終わった。しかしその次の日だった。
家に帰るとあの情報提供者からメールが届いていた。そこには詳しい内容まで書かれていた。
「酷いものだな」
その内容はこうした糾弾サイトを開いていていじめについて熟知

している彼をしてもこう言わさしめるに充分なものであった。
「ここまでしたのか」
まずはその内容に眉を顰めさせた。それと共にある決意をするのだった。
「それならこちらも徹底的にやるか」
こう決意したのである。そのうえで、であった。
メールの内容を詳しく読んでいく。そしてそのうえで。自分からその提供者に対して会いたいと申し出たのであった。
その話は順調に進んだ。彼はある喫茶店でその情報提供者と待ち合わせた。彼はすらりとした美男子であり如何にも優しそうな外見であった。その彼が来たのである。
「はじめまして」
「はい、私は岩清水といいます」
まずは立って彼に挨拶をするのだった。
「あのサイトの管理人です」
「どうも、星井です」
彼は微笑んでこう名乗ってきた。
「あの学園の生徒でした。そして今は博物館で学芸員をしています」
「メールで自己紹介されていた通りですね」
「はい、そうです」
穏やかな笑みで答えてきた。その笑みとそして目から岩清水は彼が信用できる人物だと即座に見抜いた。彼にはそうした眼力が備わっていた。
「あの学校では一組にいました」
「一組ですか」
「隣のクラスです」
そこだというのである。
「二組に行くことが多くてその現場をよく見ました」
「そうなのですか」
「クラスに中学校からの友人がいまして」

だからその二組に行くことが多かったというのである。
「それでなのです」
「それでですか」
「はい、そしてその友人ですが」
ここで席に着いていた。そうして向かい合って座りそれぞれホットティーを飲みながら話をしていた。
「彼はいじめには参加していません」
「その友人はなのですね」
「それは誓って言います」
その情報提供者である星井の言葉が強いものになっていた。それが決して演技ではないということは岩清水の見抜いているところだった。

第六章

「彼は他人をいじめたりはしません」
「断じてですね」
「そう、断じてです」
岩清水の念の為の探りの言葉にも強く返したのであった。
「彼は今はある大学の大学院にいまして」
「その人はいじめの現場を見ていたわけですね」
「はい。確か今日時間がありますので」
「その人に御会いできますか？」
「連絡を取ってみます」
星井はすぐにであった。自分の携帯を取り出してメールを送る。そうしてそのうえで暫くして小柄な若者が店に来た。彼が誰であるのかは言うまでもなかった。
「その彼です」
「星井君、その彼は」
「あのことについて知りたいそうなんだ」
まずはその小柄な彼にこう述べた星井だった。
「あのことにね」
「そうなんだ。遂にそういう人が出て来たんだね」
彼は星井の言葉を聞いて観念した様な声を漏らした。その顔を俯けさせて。
「僕はあの時何もできなかったけれど」
「この人はいじめについてのサイトを開いているらしくて」
星井は彼に岩清水のことも話した。岩清水は今は礼儀正しく座ってそのうえでその彼を見ている。その目は彼もまた見極めていた。その結果信頼できる人物だと見抜いたのである。
（あの連中とは全く違う）
小笠原や古館のことである。

（あの連中は明らかに悪事を隠している。しかしこの二人は違う）
そのことを見抜いていたのである。
（それなら。話を聞けるな）
そう決断を下して。星井が呼んだ彼の話を聞くのであった。
「それでですが」
「まず僕の名前ですね」
「はい、何と仰るのですか」
「渡辺です」
それがこの小柄な彼の名前であった。
「宜しく御願いします」
「そうですか。渡辺さんですね」
「そうです」
ここでこの彼の名前もわかったのだった。
「それで仕事は星井から連絡があったと思いますが」
「大学院におられるとか」
「はい、慶応の大学院です」
そこだというのである。
「機械工学の分野にいます」
「そうなのですか」
「これで私のことはおわかりですね」
「はい」
渡辺のその名乗りにこくりと頷いてみせた岩清水だった。
「有り難うございます」
「それではお話させてもらいます」
渡辺は席に着き目の前にホットティーが来るとそのうえで話をはじめた。
「あのいじめのことを」
「御願いします」
こうしてであった。彼はそのいじめの内容を詳しく聞いた。ただしそれは誰がやっていたのかは岩清水には言わなかったのであった。

「それはちょっと」
「言うのがはばかれますか」
「すいません」
あくまでその内容を話しただけであった。
「私がお話できるのはこれだけで」
「わかりました。それでは」
「これで宜しいですね」
「後は私の方でやらせて頂きます」
既にそのやり方はわかっていた。だから渡辺にはあえて聞かないのであった。
「有り難うございました」
「はい、それでは」
「ああ、ただ」
しかしであった。ここでふと彼にこの人物の名前を出したのであった。
「古館という人ですが」
「あいつですか」
「御存知なのですね。前に修和高校の教師をしているということで御会いしたのです」
こう話すのであった。
「少し学校のことを調べている時に」
「そうですか」
「この人は」
「名前を御存知なら仕方ありません」
「そうだな」
渡辺の真剣な言葉に彼の横に座っていた星井も頷いたのだった。
二人は顔を見合わせていた。この流れも岩清水の計算通りであった。

第七章

「それだと」
「御存知だったんですか」
「はい、御会いしまして」
これは偶然だったが確かにそうなったものである。
「そうですか。あの人だったのですか」
ここでは自分が確信したことは隠してみせたのだった。己の心の動きは。
「そうだったのですか」
「ええ。あいつ学校の先生になったんですね」
「母校の」
「それでですが」
あらためて二人に尋ねる岩清水だった。紅茶には今は口をつけてはいない。
「あの人はいじめグループでは」
「中心の一人だったな」
「そうだったな」
星井と渡辺は顔を見合わせてこのことを確認し合った。
「四人のうちのな」
「ああ、確かにな」
「中心にいたのは四人だったんですね」
「はい、他にも結構いましたけれど」
「どれ位いた？」
星井はそのことをそのクラスにいた渡辺に尋ねた。やはり彼はクラスが違っていたせいでこのことを詳しくは知らないのであった。
「いじめていた奴等」
「四人以外に八人位だったか？」
渡辺は考えてからその数を思い出した。左手の指が自然にその数

を数えている。
「確かな」
「全部で十二人ですか」
「それとですね」
渡辺はここで言わなくてもいいことを言ってしまった。それは犠牲者を増やすことになるのだったが神でない彼にはそれがわからなかったのである。
「体罰もあったんですよ」
「体罰もですか」
「それはですね」
目を光らせた岩清水に対して目を顰めさせた渡辺、二人は実に対比的になっていた。その中でさらに話されていくのであった。
「体育の先生で」
「体育のですか」
「宮崎先生っていうんですけれどね」
彼はその名前を出した。すると岩清水の脳裏でその名前が浮かび出て来たのであった。それは古館が言っていた名前であった。
「僕達の学年主任で」
「あまりいい人じゃなかったな」
星井もまた顔を顰めさせていた。
「どうもな」
「いつも竹刀持っていたしな」
「竹刀をですか」
「そうなんですよ」
このことを岩清水に話す渡辺だった。
「先を分かれさせた竹刀持ってですね。それで壁とか床叩いて生徒を脅して」
「それで体罰をですか？」
「ああ、それは流石に首になりますから」
それはなかったというのである。

「ただですね。そのいじめられていた奴を目の仇にしていまして」
「しつこくですか」
「余分に動かしたり何かマンツーマンで教えていましたね」
「マンツーマンで、ですか」
「そうです」
ここで岩清水の目がさらに光ったのだった。それも剣呑に。
「マンツーマンで。二人だけで」
「ではその時に」
「そうだったと思います」
真顔で答える渡辺だった。
「確かなことはわかりませんけれどね」
「そうですか。それでもですね」
「かなり怪しいですね」
「わかりました」
このことも頭に入れておく彼であった。
「あとですね」
「まだ誰かいますか？」
「小笠原という人間がいますけれど」
「あいつですか」
その名前を聞いた渡辺の表情が一変した。星井もであった。

第八章

「何処であいつを知ったんですか？」
「一体」
「まあ少し」
自分の勤めている会社にいるとは言わない。ここはオブラートに包んで言ったのだった。これもあえてであり考えあってのことである。
「学校で名前を聞いたので」
「そいつがリーダーだったんですよ」
「そのいじめグループの」
「あいつがですか」
「はい、そうです」
渡辺はこれまで以上に顰めさせた顔ではっきりと答えた。
「あいつが考えて中心になっていたんですよ」
「殆どあいつがですね。他にその古館入れて合わせて三人」
「小笠原を入れて四人ですね」
「その四人が主犯だったんですよ」
渡辺は言ったのだった。
「あの連中がだったんですよ」
「あれだけのいじめのですか」
「それで耐え切れなくて自殺したんです。僕はですね」
ここで渡辺はその顔を暗くさせた。そのうえで言うのであった。
「そのいじめられていた奴の友達だったんですよ」
「僕もです」
渡辺でなく星井も顔を伏せてしまった。
「実はですね。中学が同じで」
「三人一緒のクラスだったこともあります」
「そうだったんですか」

「庇ったりもしましたし励ましたりもしました」
「けれど。それを表でやらなかったから」
二人は俯き暗い顔で述べだした。
「いじめの標的にされるのが僕達も怖くて」
「それで。表立って動けなかったから」
「そこなのですよね」
岩清水は確かにいじめを憎んでいる。そしてその厄介なことも知っている。だから今の二人の言いたいことも気持ちもわかった。そのうえでの言葉だった。
「いじめの厄介なことは。自分のやられたら怖い、嫌だって思いますよね」
「はい、本当に」
「それは」
二人は今にも泣きそうな顔で彼の言葉に頷いた。
「あの時そうでした」
「それであいつは耐えられなくなって」
「任せて下さい」
岩清水ははっきりと言った。
「これから貴方達には関係ないことですが」
「関係ないとは」
「それは」
「まあ後はですね」
「後は？」
「私のことで貴方達は今日のこともお話しなかったし私とも会ってはいない」
秘密にしようということであった。
「そういうことで御願いします」
「そうですか」
「それで、ですか」
「はい、それでは」

これで話がまとまった。岩清水は二人に最後にとあるものをメールで自分のサイトに送ってくれるよう頼んでからそのうえで別れた。そうして次の日会社で。

また総務部に用があるということで来た。そうしてであった。

「あっ、小笠原君」

彼に声をかけたのである。

「あのさ、仕事頼みたいけれど」

「仕事って？」

「調達っていうかさ、営業部で欲しいものがあってそれ貰えるかな」

「調達？」

「うん、それはね」

ここで言うのだった。さりげなく。

「バスケットボールね」

「バスケットボール？」

「うん。ちょっと息抜きの時に皆で遊びたくてね」

そうだというのである。

「それは駄目かな」

「ちょっと娯楽とかのやつだと」

小笠原は彼の言葉に仕事として応えて言葉を返した。

第九章

「駄目だけれど」
「駄目なんだ」
「悪いけれどね」
眉を少し顰めさせて彼に答えた。
「それはちょっとね」
「ああ、それでもだよ」
ここからだった。岩清水はあえて声を大きくして総務部全体に聞こえるようにして言った。だがさりげなくは装い続けていてである。
「人にぶつけたりとかね。そういうのはしないから」
「えっ！？」
「あくまでバスケをするんだよ」
びくっ、となった小笠原に対してさらに言うのだった。
「バスケだから。相手にタックルしたりさ。足をかけたりはしないから」
「そ、そうなんだ」
「うん、やっぱりあれだよね」
目もであった。さりげなくである。彼は演技を続けていた。
「そういうことをするのって人間として最低だよ」
「だよね」
小笠原は彼の言葉に青い顔で頷いていた。本当に蒼白であった。
「そういうことはね」
「ましていじめでそれをやる人間なんてスポーツをやる資格がないし」
岩清水は何でもないふうを装って言っていく。
「社会で生きる資格もないんじゃないかな」
「ちょっと岩清水君」
「そんな人間なんていたら最悪じゃないか」

総務部の人達がここで笑いながら彼に言ってきた。
「いじめなんてする人間ってあれよ」
「最低だよ」
「そうそう、総務部にそんな奴はいないよ」
こう口々に彼に告げるのだった。ただしこの言葉は小笠原の耳にも入っている。彼は自分の顔を蒼白にさせたまま一連の話を聞いていた。
「絶対にね」
「それはいないわよ」
「そうですね。けれどですよ」
総務部の反応は岩清水の想定していた状況の一つであった。そして彼はその場合に用意していた言葉をここで出すのであった。
「若しもそういう人間が総務部にいたらどうします？」
「馬鹿を言っちゃいかんよ」
如何にも温厚だがそれでいて重厚そうな面持ちの総務部長が席を立って岩清水に言ってきた。
「そんな人間は総務部にいてはいけない」
「部長はそう御考えなんですね」
「当然だよ。総務部は会社の縁の下の力持ちだよ」
そうだというのであった。
「そこにいる人間がいじめなんかしたら」
「会社は持ちませんか」
「いじめなんてする奴は絶対に許さん」
部長は断言した。
「そんな奴は人間の屑だ。成敗してやる」
「そうですよね。最低ですよね」
少しぼんやりとした感じで部長の今の言葉に頷くのだった。
「やっぱりいじめは」
「総務部にいじめはない」
「そうですよ」

「それは絶対に許せませんよ」
上司もそうなら部下達もだった。総務部の面々はここでそれぞれ言うのだった。
「そんな人間は何があろうともよ」
「やっつけてやるよ」
「その通りだよ」
「ですよね。安心しました」
岩清水は今度は微笑を作った。
「その御言葉を聞いて」
「それで岩清水君」
「悪いけれどバスケットボールは」
「すいません」
総務部の彼等の言葉に申し訳なく謝った。
「僕も変なこと言ってしまって」
「いいよ。わかってくれたらね」
「それでね」
「はい」
「そういうのは自分達で御願いね」
こう告げられるのだった。

第十章

「それでいいね」
「わかりました。それにしても」
彼等の言葉にここまで応えてであった。小笠原に顔を戻して言うのだった。
「小笠原君」
「う、うん」
彼は一切喋らなかった。顔面蒼白になったままそこにいた。岩清水に声をかけられてそれでようやく我に返ったといった感じだった。
「総務部っていいところだね」
「そ、そうだね」
戸惑いながら応える彼だった。
「僕もそう思うよ」
「全くだよ。本当にいじめは最低だよ」
ここでも言うのだった。
「絶対にやったらいけないね。いや」
「いや？」
「過去にそういうことがあっても駄目だよね」
「そうだね」
顔は蒼白のままだった。
「僕もそう思うよ」
「それじゃあまたね」
申し訳なさそうな顔を作っての言葉である。
「今日は悪いね。変なこと言って」
「いいよ。じゃあまたね」
「うん。じゃあ」
この日はこれで終わった。しかしであった。岩清水は牙を磨き続けていた。そうしてある時。支持者達に対してネットでこう呼び掛

けたのである。
彼はメールをくれている強硬ないじめ反対論者達に対して呼び掛けたのである。
『いじめっ子の一人の居場所がわかった』
その修和高校の話だ。
『一人のな』
『何っ、何処だ？』
『何処ですか？それは』
『修和高校です』
そこだと同志達に教えたのだった。
『そしてそれを行っていた人間もです』
『母校にいたんですか』
『そのいじめっ子は』
『それは教師です』
このことを言うとだった。彼の同志達の文章の中身が一変したのだった。そこからは表情は窺えない筈なのにはっきりとわかったのだった。
『えっ、先生！？』
『教師のですか』
『はい、二人います』
言ったことは一つだけではなかった。
『二人です』
『何か腐った高校なんですね』
『そんな連中が教師をやっていたのか』
『許せませんね』
文章の中にも憤りが出て来ていた。今彼等はメッセにおいて話をしている。その中で話が紛糾し興奮したものになっていたのである。
『それでですけれど』
『岩清水さんの御考えは？』
ネットにおいてはハンドルネームを使っている。しかしこのメッ

セではお互い本名で呼び合っている。その方が同志意識を強く持て合い個人情報を知り合うことで相互にリスクを負わせることを意識させそのうえで秘密も保てるという岩清水の考えからそうしているのだ。
『どうされるんですか？』
『徹底的にやります』
これが彼の考えであった。
『いじめは絶対に許せませんから』
『そうですよね、それじゃあ』
『皆で学校に行くんですね、その修和高校に』
『その通りです』
まさにそうだと答える岩清水であった。
『しかしです。まずは隠れて下さい』
『隠れるんですか？』
『デモをせずに』
『物事には手順があります』
彼は同志達に対して述べた。
『ですから学校に着いたらまず隠れて下さい』
『まずは、ですか』
『それからですね』
『私に考えがありますから』
彼はメッセに書き込んだ。

第十一章

『任せて下さい』
『はい、わかりました』
『それでは岩清水さんにお任せさせて頂きます』
『今回も』
　同志達は次々に書き込んでいくのだった。
『それではそういうことで』
『その日は』
『はい、頑張りましょう』
　岩清水はまた同志達に対してまた書き込んだ。
『いじめをなくす為に』
『いじめをする奴を滅ぼしましょう』
『何をしてでも』
　同志達も書き込んでいく。そうして後日。岩清水は修和高校をまた訪れた。そうしてあの古館を呼んだのであった。それも時間のある昼休みにだ。
「また見学でしょうか」
「はい」
　温厚な顔で笑って答える岩清水だった。
「一つ面白そうな場所がありましたので」
「面白そうな場所ですか」
「そこを見学したいと思いまして」
「それで私を呼んで下さったのですね」
「そうです」
　こうとだけ答えるのだった。
「宜しいでしょうか」
「はい、喜んで」
　古館もまたにこやかに笑って彼の申し出に応えるのだった。

「それではそこに行きますか」
「御願いします」
「それで何処でしょうか」
岩清水に対して問う古館だった。彼は岩清水をただの受験生の関係者としか思っていなかった。彼の本当の顔にはここでも気付いてはいなかった。
そうしてそのまま。彼に問うたのだった。
「その場所は」
「体育館です」
「体育館ですか」
「今は開いているでしょうか」
こう彼に対して問うのだった。
「体育館は」
「あそこはですね」
体育館と聞いた彼はまずは少し考える顔になった。それから岩清水に対して答えた。
「お昼は開いていないのですよ」
「開いていませんか」
「はい、それでですね」
このことを話したうえでさらに言うのだった。
「鍵を取って来ますので」
「それではその間は」
「ちょっとここで待ってて下さい」
古館は完全に善意の来客に対する態度だった。
「すぐに戻って来ますから」
「はい、わかりました」
岩清水は紳士的に古館の言葉に頷いた。そうして彼が自分に背を向けて鍵を取りに行くとだった。すぐに懐から携帯電話を取り出してメールを打つのだった。
古館はすぐに戻って来た。そのうえで岩清水をそこに案内するの

だった。
「あそこの設備は凄いのですよ」
「そんなにですか」
「我が校の自慢の一つです」
こうまで言うのだった。
「筋肉トレーニングの為の設備も充実していまして」
「そういうものまであるのですか」
「進学校ですがスポーツも重要視していまして」
「文武両道ですね」
「はい、そうです」
まさにそうだと答えるのだった。
「ですから本当に設備が充実しています」
「成程」
「それでですね」
さらに岩清水に対してその体育館のことを話すのだった。話しているうちにその体育館の前まで来た。そうしてすぐにその鍵の扉を開けた。
「さあ、どうぞ」
「ああ、そういえばですね」
岩清水はここでまた言うのであった。にこやかな笑顔のままで。

第十二章

「この体育館のことですが」
「中を見学されたいのですよね」
「そうです。特に」
「特に？」
「貴方が殺したも同然のある人のことで」
その言葉と共にだった。岩清水の後ろに突如としてめいめい私服の一団が姿を現わした。そうして古館を取り囲むと取り押さえそのまま体育館の中に連れ込んだのだった。
「な、何だ！？」
古館はまず何が起こったのかわからなかった。
「何なんですか、貴方達は」
「あそこですよ」
岩清水は古館を完全に取り押さえ中に連行していく同志達に対して告げた。中に入る時に体育館の鍵を締めておくことは忘れなかった。
「あそこの中に入れましょう」
「体育館の倉庫ですね」
「あの中ですね」
「はい、あの中です」
そこにだと同志達に対して話すのだった。
「あそこで問い詰めましょう」
「そうですね。あの中は絶好の場所ですね」
「誰も入っては来ませんし」
「それに」
ここでそのうちの一人が言った。古館を抑えている一人だった。
「あそこが現場ですしね」
「そうです、だからです」

岩清水は残忍な笑みを浮かべていた。そのうえで言うのだった。
「こいつにとってもです」
「体育倉庫に？まさか」
連行されて行く古館はここで不吉なものを悟ったのだった。
「そこはまさか」
「そうです。あの場所ですよ」
古館に向けた笑みはぞっとするものだった。笑っていたがそれは子供が虫をゆっくりと時間をかけて足をもぎ取って火で炙る様な、そうした笑みであった。
その笑みを彼に向けたうえでその倉庫の中に入る。倉庫の中にはマットやボールとそれを入れている箱、それと跳び箱がある。そういったものが並んでいる中に古館を連れて来たのだった。
その彼をマットの上に放り出してだった。岩清水はそこから彼に言ってきた。
「一つ御聞きしたいことがあります」
「御聞きしたいこと？」
「この倉庫で何があったのかは御存知ですよね」
彼を見下ろしてまだその笑みを浮かべていた。
「七年前に」
「七年前！？まさかあのことを」
「そう、あのことをです」
古館を見下ろしながら冷酷そのもので笑い続けていた。
「この倉庫で一人の生徒が自殺しましたね」
「いじめでしたよね」
「それですよね」
同志達がそれぞれ言ってきたのだった。彼等は既に古館を取り囲んでいる。そうして彼を逃げられないようにして威圧しながら言ってきたのである。
「いじめを苦にして」
「それで自殺を」

「貴方のクラスメイトでしたね」
また言ってきた岩清水だった。
「そうですね」
「知りません」
岩清水から顔を背けての言葉だった。
「そんなことは」
「一年二組でしたね」
その顔を背けさせ続ける彼に言い続ける岩清水だった。
「そうでしたね」
「知りません」
「知らないのですか」
「そうです」
顔を背けさせ続ける古館だった。彼の言葉は意固地なものにさえなっていた。
「何も知りません」
「クラスメイトの教科書に色々な色のマジックで落書きしたことは？」
岩清水は顔を背ける彼にこう言ってきたのだった。
「それは御存知ありませんか」
「それは・・・・・・」
「ではお弁当に色々なものを入れたことは」
今度はこのことを言ってみせたのだった。

第十三章

「そして縛って掃除用具入れに閉じ込めたことは。机に接着剤を塗って動けなくしたことは。盗みの濡れ衣を着せたことは。全部知らないですか」
「それは・・・・・・」
「知ってますね」
ここで懐からあるものを出して来たのだった。それは。
「これはその時の一年二組の名簿です」
「何故そんなものを」
「私の手にたまたまあったものです」
何故入手したのかは最初から言うつもりのないことだった。しかしそれは言わなくとも聞くことは聞くのだった。それは決めていたことであった。
「それだけです」
「犯罪じゃないですか」
きっとした顔で岩清水を見据えての言葉だった。
「それは」
「犯罪ですか」
「そうしたものを入手するとなると」
そのことを責めるのだった。
「犯罪じゃないですか」
「それは貴方のしたことですね」
岩清水はそれを指摘されても平然と言い返すのだった。全く動じてはいない。その態度のままでさらに問い詰めるのであった。
「貴方の住所も抑えました」
「何っ！？」
「そして御家族も」
平然としているがこれ以上はない脅しだった。

「御両親はまだ働いておられるのですね」
「そこまで。どうして」
「御子息の不祥事が御両親に響かなければいいですが。会社の役員をされている御二人に。若しかして競争相手に付け込まれるかも知れませんね」
こう彼に対して言うのであった。そうしてさらに。
「御両親の老後を無惨なものに変えたくはないでしょう？妹さんも今年受験ですよね」
「それは・・・・・・」
「ここで何かあれば困ったことになりますね」
冷酷極まる言葉は続く。
「そうですね」
「うう・・・・・・」
「では教えて下さい」
彼は言い続ける。
「貴方のお友達は誰でしょうか」
ペンを差し出す。そして紙もだ。
「御両親と妹さんに何もなければいいですね」
「・・・・・・わかりました」
遂に古館も陥落した。そうしてそのペンで名簿欄にある名前のうち何人かのところにマルを描いて印をつけたのであった。そこには住所も書かれていた。
「これでいいんですね」
「はい、そしてですが」
「そして？まだあるんですか」
「宮崎先生でしたね」
彼のことも聞いてきたのである。
「教頭先生。その時の学年主任の先生ですね」
「まさかあの人にまで」
「はい、そうです」

やはり冷酷な笑みだった。死刑執行人の笑みである。
「あの方は体罰を行っていましたね」
「・・・・・・はい」
「貴方はそれを御存知だったのですか？」
「詳しくは見ていません」
見てはいないと答えた。
「ですが」
「行っていたのは事実ですね」
「そうです」
そのことははっきりと答える。それは今の古館にとっては答えるしかないものであった。
「それは間違いありません」
「わかりました」
古館の言葉に頷いてみせた岩清水だった。
「そのことは」
「ただ。何をしていたかまでは」
「それは貴方には関係のないことです」
そう言ってこのことにそれ以上彼に言わせなかった。
「ですから詮索は無用です」
「うう・・・・・・」
「それでは」
ここまで聞いてであった。彼は話を終えた。そうして冷たい目で古館を見つつそのうえで彼に対してこれまた実に冷たく告げたのであった。まさに氷であった。
「貴方はこれで」
「あの、家族には」
「さて」
はっきりとは答えない岩清水だった。

第十四章

「早く行くことです。ただし」
「ただし？」
「口は禍の元です」
あえてこう言うだけに止めてみせたのであった。これ以上の言葉は一切不要であることがわかっていて、そのうえでの言葉であった。
「それだけです」
「・・・・・・わかりました」
「では」
こうして彼への話を止めた。彼に鍵を渡すとその後ろについていって鍵を開けさせた。そうして彼の逃げ去るその姿を見送るのだった。
同志達は慌てふためいて逃げ去っていく古館のその後姿を見送りながら。岩清水に対して怪訝な顔を向けたうえで問うのだった。
「まさかと思いますけれど」
「これで終わりですか？」
「あいつ絶対に反省していませんよ」
「反省している、していないは別の問題です」
岩清水はにこやかに微笑みながら同志達に答えるのであった。そうしてそのうえでこう言ってみせたのであった。
「全てはです」
「いつも通りですね」
「そうされるのですね」
「そうです」
こう同志達に対して答えるのであった。
「その通りです」
「それじゃあまた」
「いつもの様に」

「ただし今度は徹底的にやります」
また言った岩清水だった。
「徹底的にです」
「っていいますと」
「どうされるんですか？」
「はい、それはですね」
「それは」
「どうされますか？」
問う同志達に対しての言葉は。
「人が死んだ事件です」
「ですね」
「とんでもない話です」
「目には目を」
今度岩清水が出した言葉はこれであった。
「歯には歯を、です」
「といいますと今回は」
「まさか」
「そうなっても私達に罪はありません」
これまた実に冷酷な響きに満ちた言葉であった。しかも言葉を発しながらそのうえでまたあの無邪気な子供の笑みを浮かべているのであった。
「むしろ制裁です」
「そうですね、人をいじめて自殺に追い込む様な奴等です」
「それこそそこまでしないと」
「私もネットで動きます」
岩清水のその『無邪気な』言葉は続けられる。
「そうして皆さんは」
「どうすればいいんですか？」
「今回は」
「より多くの同志達を呼んで下さい」

そうしてくれというのである。
「そのうえで同時攻撃を仕掛けますので」
「同時攻撃ですか」
「それですね」
「ネットでも御協力下さい」
彼の言葉は続く。
「御自身のサイトやブログで紹介されたり宣伝されたりして」
「はい、それはいつも通りですね」
「わかりました」
「本格的にはじめます」
彼はまた言った。
「今から」
こうしてであった。まず彼は同志達と別れたうえでかつてのいじめっ子達や暴力教師の住所を回った。そうしてその住所を撮影した写真と共にネットで公表したのだった。古館の家もである。だがそこで主犯格の四人の住所はあえて公表しないで置いたのである。
これにより彼等のことは公になった。しかも宣伝も活発に行っていたので話はネット中に広まった。また岩清水は会社においても。あることをはじめたのであった。

第十五章

「知ってますか？実はですね」
「あの新入社員の小笠原君ですが」
噂を流していったのである。ただしこれは人に直接話してではない。某巨大掲示板に書き込んだり隠れて独り言をわざと他人に聞こえる様に言ったり人に見える場所に落書きとして置いていたりして流したのである。このやり方は実に手馴れたものであった。
その噂は次第に小笠原を包んでいった。社内の多くの者が小笠原を不穏な目で見つつそのうえでひそひそと話を囁くのであった。
「あの新入社員がなのね」
「そうらしいわ」
「あの昔の事件でね」
「そんなことをしていたの」
「最低ね」
まずはＯＬ達からであった。そうした情報に長けている彼女達から話は広まっていった。それはまさに戸口は立てられず光より速いものであった。
彼女達はすぐに彼を怪訝な目で見るようになった。そうしてそれは態度にもはっきりと出ていた。
「まさかあの噂は」
「本当なのか？」
「だとしたらこいつは」
次は男子社員達であった。同期も含めて彼を見つつ不穏な顔になって囁き合うのだった。
「あの事件で」
「そんなことをしていたのか」
「何て奴だ」
まずはそこからだった。彼は外堀を埋められた。そして岩清水は

それを見ながら。ある日誰よりも早く出社して総務部に入って。あることをしたのであった。
小笠原がそれを見て唖然となった。何と出社した彼の机の上に花瓶があったのだ。しかもその花瓶には一輪の白い椿があった。
「な、何なんだこれは」
「あれっ、椿って」
驚く彼のところに岩清水が来た。そうして何気ない顔でこう言うのであった。
「あれなんだよね。花がそのままぽとりって落ちるからすぐに死ぬとかそういう意味でお見舞いとかには不吉だって嫌われているんだよね。そう、不吉だってね」
「そういう問題じゃないよ」
小笠原は焦りきった面持ちで彼に顔を向けて言った。
「何で僕の机に」
「花瓶があるかってことかい？」
「そうだよ、誰の悪戯なんだよこれは」
周囲を見回す。だが誰もがその彼を無視して仕事の準備を進めていた。既に外堀が埋められていることが効果を出してきていた。
「誰が一体」
「さあ。ただ」
「ただ？」
「どうしてそんなに焦ってるのかな」
何も知らない顔を作って小笠原に問うてみせたのだった。
「君、凄く焦ってるよ」
「焦ってるって？」
「そうだよ。昔こうしたことを見たみたいにね」
今の岩清水の言葉に。総務部の全ての者が耳を立てた。
「そんな感じだけれど」
「いや、それは」
「僕の気のせいかな」

ここで首を傾げてみせたのだった。
「それは」
「そうだね。そうだと思うよ」
こう言いはしたがその声は誰が聞いても上ずっているものだった。言葉にその動揺がはっきりと出てしまっていた。どうしようもないまでに。
「それはね」
「そうだよね。だったら」
「だったら？」
「これはなおさないといけないね」
そうは言うが自分では動こうとしない岩清水だった。
「ゴミ箱にね」
「うん、すぐに」
「ああ、そうそう」
またふと思い出した様に言葉を出してみせる岩清水だった。そうしながらもちらりと小笠原を見る。その反応を見逃そうとはしていない。
そしてその鋭い目を隠しながら。彼は言った。
「ゴミ箱に何かあったらいけないよね」
「何か？」
「教科書？」
教科書を聞いた瞬間だった。また小笠原の顔が強張った。まるでメデューサの顔を見たかの様に。

第十六章

「いや、御免御免」
すぐに何もなかったように言葉を取り消す岩清水だった。
「何でもないよ」
「何でもないって？」
「そうだよ、教科書なんて会社にある訳がないよね」
またしても演技であったがそれには誰も気付かない。小笠原もだ。
「そんなの」
「うん、ないよ」
また言葉を返す小笠原だった。
「会社だからね。ここは」
「それにだよ」
何気ないふりを装った言葉は続く。
「教科書がゴミ箱にある筈ないしね」
「いや、岩清水君わからないよ」
「それはね」
ここで総務部の周りの人間が岩清水に言ってきた。
「実際そうしたことってあるよ」
「あるんですか」
「ほら、あれだよあれ」
「そう、あれよ」
皆言いながらその顔を小笠原に向ける。その目は非常に冷たく鋭いものであった。それはまさに氷の刃と言うべきものであった。
「いじめとかする奴いるかも知れないよ」
「人の教科書をゴミ箱に捨てるとかね」
「そうする人間って最低だけれど」
既に皆、総務部の人間も小笠原の噂を聞いていた。それは岩清水が流したものであるのはその本人だけが知っていることである。

だがその本人は何も知らない顔のままで。言ったのだった。
「そんな人いる筈ないじゃないですか」
「だから隠れてするから」
「そういうことは」
皆まだ小笠原を冷たい目で見続けていた。
「だから最低なんだよ」
「卑劣ね」
「そうですね。若しそういう人がいたら」
岩清水の何でもないといったものを装う言葉は続く。
「絶対に許したらいけませんよね」
「うん、本当にね」
「何があってもね」
これは些細なことだった。だがこの日から小笠原は社内で陰湿に村八分にされだしていた。彼は完全に孤立してしまっていた。
そうしてだった。岩清水が自分のサイトで公表した元いじめっ子達の家には連日連夜サイトで情報を得た人間が糾弾に来た。家の前で抗議しその壁に落書きをしていく。
「人殺し！」
「いじめをして楽しいか！」
「この屑！」
「息なんてするんじゃねえぞ！」
こうした罵声だけではなかった。当然ながら近所からも冷たい目で見られ家族も被害を受けた。また当人達も実際の生活に支障が出ていた。
それぞれの職場や学校まで公表された為そこにも抗議の電話が殺到し嫌がらせが来た。兄弟達にもそれは及びやがてどの家も崩壊し彼等も職場や学校にいられなくなった。後には落書きだらけの壁を持つ廃れた彼等の元の家が無惨な姿を晒しているだけであった。
そしてこの日岩清水は同志達と共に修和高校の前にいた。そこから抗議のデモを行っていた。

「古館先生答えなさい！」
「教頭先生、いるのはわかってるんですよ！」
攻撃するのは古館だけではなかった。宮崎もだった。
「貴方は生徒に体罰をしていましたね！」
「この学校ではそれが許されるんですか！」
校門で拡声器を持って盛んに叫ぶ。当然アジビラを撒きプラカード等も持ってしきりに宣伝している。そのうえで二人を攻撃している。
「いじめをする教師なぞ許すな！」
「社会の悪だ！」
そしてこう叫ぶ。すると顔がやけに細長い男が出て来た。鼻が高くどうもモアイを思わせる顔である。身体は細く小柄な印象を与える。
「一体何なんですか貴方達は！」
「誰ですか貴方は」
「教頭の宮崎です」
彼は自ら名乗ってきた。
「大体ですね、学校への嫌がらせですか？訴えますよ！」
「暴力教師が出て来たぞ！」
「実況中継だ！」
「やれやれ！」
「えっ、実況中継！？」
それを聞いた教頭は思わず身体を硬直させてしまった。

第十七章

「実況中継ってマスコミが！？」
「ネットで全世界に中継されてるんですよ」
驚く彼に岩清水が前に出て告げた。
「皆さん、いいですか！この男です！」
カメラ目線で叫ぶのだった。
「この男が暴力教師です！生徒に体罰をしていたのです！」
「馬鹿な、濡れ衣だ！」
彼はそれを必死に否定する。
「私はそんなことはやっていない！」
「その証拠はあるんですか？」
「ある！私がやったのは竹刀を持っていただけだ！」
「竹刀！」
失態だった。これを見逃さない岩清水ではなかった。そして彼は実際にここから攻撃に入ったのであった。まさに好機であった。
「皆さん、凶器です！」
「そうだ、凶器だ！」
「常に凶器を持って指導している！」
「正真正銘の暴力教師だ！」
同志達が岩清水の言葉に一斉に応える。
「やっぱり暴力教師じゃないか！」
「許すな！」
「何をしていた、何を！」
「皆さん」
岩清水はここであえて良識の仮面を被ってみせた。そのうえで同志達に言うのだった。
「ここからは少しオフレコで」
だがその直前に実況中継を担当している同志に目配せをした。こ

れからの彼の発言を消させたのである。
「それでいいですか」
「はい、それでは」
「お任せします」
「わかりました。それでは」
ここでまた同志に目配せする。全ては彼の術中にあった。
その術中の中で宮崎に対して穏やかな声をかけるのだった。
「あのですね、私達はですね」
「私達は？」
「話し合いに来たのです」
こう言ってまずは彼の心を解きほぐすのであった。
「貴方はこの学校の教頭先生ですね」
「はい、そうですけれど」
「それならです」
己の立場を確認させた。これも彼の計算の内にあった。相手を次第に己の術中の中に嵌めていったのである。実に狡猾にだ。
「正直に話して下さいますね」
その前にオフレコということは宮崎も聞いていた。それが聞いていた。
「真実を」
「真実をですか」
「そうです」
まさにそれだというのである。
「是非。ありのまま」
「ありのままといいますけれどね」
宮崎はまだ怯えていた。そうしながら岩清水に言葉を返す。身体もやや震えているのが誰の目からもはっきりとわかる。完全に飲み込まれていた。
「私は何もしていないですよ」
「ですから真実を語って下さい」

ここで画面に映らないような位置からだ。宮崎に見えるようにして紙を出してみせた。そこに書かれてあったのは。
『オフレコです。ここだけの話です。正直に話して頂ければもう一切のこうした活動は止めます』
この文字があった。これは一瞬でありすぐに収めた。しかしそれは間違いなく宮崎の目に入ったのだった。
それを見て彼は。まずはその喉をごくり、と鳴らした。そのうえでゆっくりと話しはじめた。
「実はですね」
「はい、実は」
岩清水は静かにその告白を聞いたのだった。周りの同志達も。
「体罰はしていましたよ」
彼は俯きながら告白した。
「確かにね。プールの中に放り込んでそこからモップで頭を殴ってそのうえで溺れさせたり」
まずはそれだった。
「彼だけ校庭を百周も走らせたりとかもさせましたし。いつも他の生徒より何杯もハードなこともさせましたよ」
「そうなのですか」
「あと体育倉庫の中でバスケットボールをぶつけたり。床の上で背負い投げしたりもしましたよ。石をぶつけてやったこともありました」
「そういうことをされたのですね」
「ええ」
そのまま答えたのであった。
「そうです。ですから」
「皆さん、聞かれましたか!?」
しかしであった。ここで岩清水は豹変したのだった。

第十八章

「今までの告白を。聞かれましたね！」
「はい、とても！」
「とんでもない奴だ！」
「貴様は屑だ！」
「この暴力教師！」
「地獄に落ちろ！」
同志達が一斉に吠えた。
「人間の屑！」
「成敗されろ！」
そしてネットにおいてもだ。書き込みが一気に白熱した。
『死ね！』
『くたばれ！』
『こんな屑見たことねえ！』
『もう住所も学校もわかってるからな！明日は俺が言ってやる！』
『目にもの見せてやるからな！』
宮崎への嫌悪、殺意、憎悪が爆発した。今の告白はまさに致命傷であった。
『おい、容赦する必要はないよな！』
『全くねえ！』
『抹殺してやる！』
所謂祭になった。まさに岩清水の思うがままであった。宮崎の運命はこれで決まった。
そしてここで古館が出て来た。といよりは学校側から無理矢理行かされたのだ。言うならば彼はこの時学校側から切り捨てられたのである。
「あの、何がどうなってるんですか？」
「皆さん！」

ここでまた騒いでみせた岩清水だった。
「今いじめっ子が来ました！」
「来たか、人間の屑！」
「ダニ、ゴミ！ガン！」
「社会の敵が！出て来たな！」
「教頭先生が一体何を」
最早呆然となり動かない宮崎を一瞥したうえで岩清水に問う。
「あの、そもそもですね」
約束が違うのではないかと言おうとした。しかし岩清水も同志達もそれを言わせなかった。
「さあ、自殺した彼に何をした！」
「何をした！」
「答えなさい！」
「言いなさい！」
忽ちのうちに全員で彼を取り囲んで問い詰める。ただし誰も暴力は振るわない。取り囲んでそのうえで問い詰めるだけであった。
「何をしました！」
「言いなさい！」
「言いなさい！」
「言えってそれは」
古館も抗議しようとする。しかしだった。
「言いなさい！」
「正直に言いなさい！」
「隠したら許さないぞ！」
「許さないぞ！」
他の教師達は一切出て来ない。生徒達はそれぞれの教室の窓から見ている。彼もまた誰が見ても明らかな劣勢の中に置かれてしまった。
そうしてだった。三十人はいるデモ隊に囲まれて。延々糾弾される。それで遂に言った。

「はい、やりました」
今の状況から少しでも早く逃げたかった。だからこそ彼は告白する道を選んだ。最早それしかなかったからである。
「私が彼をいじめていました」
「どうやってですか？」
「靴の中に画鋲を入れました。下駄箱にゴミを一杯入れました。教科書を落書きだらけにしてそれでゴミ箱に捨てたり机や椅子に接着剤を塗ってやったりもしました」
「まだあるか！」
「あるのか！」
デモ隊はさらに彼を問い詰めていく。
「どうなのだ！」
「答えなさい！」
「答えろ！」
「他にもやったのか！」
「は、はい。やりました」
真っ青になった顔でまた言うのだった。
「茶室の側の庭園で皆で箒やバットで殴ったり。鞄の中に鼠の死骸入れたり頭に火を点けたり」
「まだあるのか！」
「答えろ！」
「隠すな！」
「あれば言え！」
「隠すことは許されない！」
デモ隊はまだ許さない。糾弾をまだ続ける。
「あります」
今にも死にそうな顔でその糾弾に応える古館だった。

第十九章

「トイレで水をかけてぼろぼろにしたり弁当にゴミとか海苔とか入れたりしました。それと無理矢理ゴキブリを食わせたりロッカーに閉じ込めて失禁させました。あと飼育小屋の兎達を自分達で殺してその罪をなすりつけました」

「それで全部ですね」

「マットに押し込んでサンドバックにもしました」

「皆さん、聞きましたか！」

「はい、聞きました！」

「確かに聞きました！」

「こいつは犯罪者だ！」

全て白状させてからもなおも取り囲み糾弾を続ける。その中には古館だけでなく宮崎もいた。二人を絶対に許すつもりがないのは一目瞭然だった。

「最低最悪の人間だ！」

「人間以下だ！」

「さあ、生徒の皆さん教師の皆さん！」

岩清水は密かに宮崎と古館の言葉だけを収録していた。それを今大音声で持って来ていたラジカセにかけてこれでもかという大音声で流し出したのだった。

「これが貴方達の先生達がやって来たことです！」

「これがだ！」

「これをどう思う！」

「最低じゃないのか！」

同志達は一斉に彼等に問うた。拡声器を使って。

「許せるのか！」

「そして皆さん！」

語り掛けるのは生徒達だけではなかった。周りに集まっていた市

民達もである。警察もいるがそのいじめの内容を聞いたのと事前に許可を得ているとのことなので動かなかった。そうした治安を司る相手の感情にも訴え法の手配もしているのであった。
「これは許されることでしょうか！」
「いじめが！」
「これだけ卑劣で醜悪ないじめが！」
「どうなのでしょうか！」
こう問われるとだった。市民達の反応も決まっていた。一つしかなかった。
「許されるか！」
「屑！死ね！」
「教師辞めろ！」
「地獄に落ちろ！」
中には激昂し二人に襲い掛かろうとする市民もいた。しかし岩清水はそうした激昂する市民達の前にあえて立ってそれで止めたのだ。
「暴力はいけません」
「何故ですか？」
「こんな屑何をしてもいいじゃないですか」
「そうだそうだ」
「暴力を振るえばです」
彼は良識の仮面を被ったのであった。
「それで彼等と同じになってしまいます」
「同じに」
「この連中と」
「そうです。いじめは最低最悪の行為です」
このことは断定する。それと同時に過去それを行ってきた者達もそう断定する。二重の断定をあえてしてみせたのである。これも周到にだ。
「そうですね」
「はい、そうです」

「この連中みたいに」
「この連中と同じことをしてはいけません」
くれぐれもという口調であった。
「それだけはいけません」
「ではどうするのですか？」
「それは」
「暴力はいけません」
まずこれは絶対だというのである。
「ですがいじめをなくさなくてはいけません。その為にはです」
「その為には」
「どうするべきだというのですか？」
「悪を許してはいけません」
最初に答えとして出した言葉はこれであった。
「そう、決してです」
「決してですか」
「悪は」
「そうです。いじめを糾弾しましょう、そして撲滅しましょう」
ここでもいじめという行為とそれをした人間を一緒にしている。
意識してそう言い市民達も巻き込んでみせたのである。ここでも、
であった。
「そう、撲滅です」
「そして糾弾ですね」
「それをするのですね」
「そうです」
まさにそれだというのである。
「皆さん」
穏やかに彼等に声をかける。

第二十章

「ここはです」
「いじめを糾弾して」
「撲滅して二度と立ち上がれないようにすると」
「まさにそうです」
穏やかに煽り続けていた。誰も気付かないうちに。
「いじめを許すな！」
そのうえで急に叫んだのだった。シュプレヒコールだった。
「いじめを許すな！」
「いじめを許すな！」
「何があっても！」
同志達がそれに続く。
「いじめを撲滅しろ！」
「消し去れ！」
こう宮崎と古館に対して叫ぶ。それは延々と続いた。
そして連日連夜二人の自宅の前でも抗議活動が行われた。それには生徒の親達も積極的に加わり勢いは止まらなかった。
やがて宮崎と古館は学校に来なくなった。学校でも毎日抗議を受けた。電話は鳴り止まず校門には抗議のデモ隊が集まっている。生徒の親達も抗議に直接来る、そして生徒達も面と向かって罵倒する。それではどうしようもなかったのである。
宮崎も古館も家庭は完全に崩壊してしまった。宮崎の妻は離婚し実家に子供達を連れて帰った。彼は抗議の市民達やデモ隊によってこれ以上もないまでに荒らされ庭も壁も車も荒されゴミが手当たり次第に投げ込まれ滅茶苦茶になった家の中で引き篭もった．そしてある日遂に首を括ってしまった。
古館はまず両親は会社の役員を辞めるしかなくなった。妹は学校で兄の行いがばれてしまい執拗な嫌がらせを受けた。それに耐え切

れず地方の親戚のところに養子に入ったうえで転校した。両親は失踪してしまいやはり彼だけが廃墟になろうとしているかつては立派だったが宮崎のそれと同じ様に荒れ果ててしまった自宅の中で引き篭もっていた。

「いじめを許すな！」

「責任を取れ！」

「謝罪しろ！」

「謝っても許さないからな！」

朝から夜まで市民達やデモ隊の抗議の声が聞こえてくる。それまで明るい笑顔を向けてくれた近所の人達までもがいる。自分を幼い頃から可愛がってくれた近所のおじさんやおばさん達までもが。そういった人達までもが今では彼に対してシュプレヒコールを挙げていた。

やがてある真夜中に彼も何処かへと姿を消した。その行方はわからない。しかし彼の乗っていたデモ隊や近所の人達に荒らされ廃車寸前になった車が崖の下の海から見つかった。それだけであった。

これで岩清水は目的を幾つか果たした。しかしそれで終わりではなかった。

次はであった。彼はまたメッセで同志達と話をしていた。その話は。

『今度はですね』

『はい、今度は』

『誰ですか？』

『残るは三人です』

彼はそのターゲットの数を同志達に述べた。

『主犯格の残る三人です』

『本丸ですね』

『いよいよ』

『はい、そうです』

まさにそうだと答えるのだった。

『その三人がです』
『今度はどうします？』
『また住所をサイトで晒しますか？』
『はい』
それだというのであった。
『それです。それをします』
『そうですか。それですか』
『いつもの通りですね』
『それが一番効果的ですから』
熟知してのことだった。
『そこからです』
『それで抗議活動を行って』
『またそうしていって』
『ただしです』
ここで岩清水は同志達に書き込みで告げた。
『主犯の中の主犯の小笠原はまだです』
『まだ仕掛けないのですか』
『二人からです』
こう書き込むのである。
『最後の一人はですね』
『はい』
『最後の一人は？』
『じっくりといきましょう』
この書き込みには既に彼の決意があった。その不気味なものさえ感じられる黒い決意をである。糾弾であってもそれは黒いものであった。
『そう、じっくりとです』
『じっくりとですね』
『まずは二人を』
『はい、最初は』

こうしてまた計画が考えられていく。その間にもだった。小笠原は追い詰められていっていた。

第二十一章

最早会社で彼を相手にする人間はいなかった。誰もが嫌悪の目で見てそのうえで露骨に嫌な顔をする。そうして無視していた。

岩清水もだった。何かと理由をつけてだった。総務部の面々にこう言うのであった。

「どうしても空気が悪くなりますよね」

「そうだね」

「本当にね」

総務部の面々も彼の言葉に頷く。そうしてから自分の席で暗い顔になっている小笠原をじろりと見る。そのうえでわざと彼に聞こえるようにして言うのであった。

「俺最近子供に教えてるんだよ」

「私もよ」

「何てですか？」

「いじめだけはするなってね」

「そういつも言っているわ」

岩清水の言葉に応えてであるのは言うまでもない。やはり小笠原をじろりと見ながらそのうえであえて聞こえるようにして言っていた。

「それは最低の人間のやることだってな」

「親子の縁を切るってね」

「けれどあれですよね」

岩清水は何気なく、あえて小笠原に対してではなく素っ気無くを装って述べる。ここでも何も知らないしわかっていないふりをしている。

「そういう人に育てるっていう親も」

「そうだよ、だから教えてるんだよ」

「親として失格よ」

誰もがここぞとばかりにこう主張した。
「だから何があってもだ」
「いじめは許さないわ」
「そうですよね。ほら、人の教科書に落書きしたり捨てたりとか」
あえて小笠原の過去を総務部全体に聞こえるようにして言う岩清水だった。
「机に接着剤塗ったり」
「人間のすることじゃないな」
「屑ね」
「そんな屑な人が会社にいますかね、我が社に」
「いたら恥だよ」
「何があっても許さないわよ」
岩清水の言葉に乗って誰もが言い。そのうえで小笠原を睨み続けていた。
「まだ会社に来ているかも知れんけれどな」
「恥知らずなことにね」
「幾ら勉強ができてもですね」
岩清水の今の言葉はこれ以上はないまでにはっきりとした小笠原へのあてこすりであった。やはり彼は何もかもわかってやっていた。
「駄目ってことですね」
「成績がいいから妬むとかあるんじゃないか？」
「嫌な話だけれどね」
「そうそう、それでいじめをする人間って」
言いながら小笠原の後ろに来る。彼は完全に沈んだ顔で俯いて何も言わない。仕事も与えられなくなりただいるだけになってしまっているのである。
その彼の後ろに来てだ。岩清水はさらに言うのであった。
「例えばですね」
「うん、例えば」
「どうなの？」

「人の背中から髪の毛に火を点けたりとかですとね」
やはり小笠原の過去の行動である。そうしたことは全て古館から聞き出していたのでそれを何処までも攻めていくのであった。
「そういうことって」
「ライターはあれだよ。煙草とかに火を点けるものだ」
「人に点けるものじゃないわよ」
「そうですよね。全くですよ」
言いながら懐から百円ライターを取り出してだ。そっと小笠原の横に置いてみせるのであった。そしてまた言うのであった。
「普通の人はライターを持っても絶対にしませんからね」
「人間じゃない奴のすることだな」
「全く以ってね」
こうした行動を延々と続け彼のロッカーの中のものを全部捨てて壊したり時には真夜中に彼の机を総務部の外に置いたりもしていた。当然ネットでの工作も執拗に行なっていた。同志達も入れて。彼のそうした工作は延々と続けられていたのであった。
そのうえで、であった。残る二人に対しての活動が遂に本格的になったのであった。
まずは一人だった。その名は。
「筑紫博、こいつですね」
「こいつがその二人の片割れですね」
「はい」
一枚の写真を見せる。そこに移っているのは黒い癖のある髪を少し上にあげて太い眉を持っている青年であった。顔立ちは精悍な方で整っている。岩清水は道を進みながら同志達に話していた。

第二十二章

「こいつです」
「そうですか。こいつですか」
「それが今度のターゲットですか」
「会社の前に行きます」
そうするというのである。
「会社は中規模の貿易会社でして」
「そこの跡継ぎってわけですね」
「親が社長ですか」
「将を射るにはまず馬を射よです」
岩清水の声は至極冷静であった。
「いつも通りですね」
「やっていきますか」
「今回も」
「はい。それでは皆さん」
車が右に通る六車線の車道の横の歩道を二十人程度で進んでいく。やがて目の前に住人程既に集まっているのが見える。もう抗議活動をしていた。
「出て来い国分博！」
「御前がやったことはわかっているんだ！」
「それでも白を切るのか！」
「卑怯者！」
プラカードや文字を見せて高らかに叫ぶ。五階建てのビルの前で。
「いじめをして人を自殺に追い込んだ奴が社長になるのか！」
「この会社は人殺しが社長になるのか！」
「そんな会社があるのか！」
こう口々に叫ぶ。警官達はここでもデモ隊の周りにいるだけで何もしない。彼等もいじめには悪感情を持っていたのと既に岩清水が

リークして呼んだマスコミ達が来ているからだ。だから何もしないのであった。見て見ぬふりをあえてしているのだった。
「社長は何をしている！」
「そんな息子に何もしないのか！」
「質問に答えなさい！」
十人程度だったが充分にアグレッシブだった。その叫び声は高らかに響いていた。
岩清水はそこに同志達と共に到着した。そうしてその白いビルの前で中心になって叫ぶのであった。
「この筑紫商事の後継者である筑紫博君は！」
名前を堂々と呼ぶ。
「七年前に同じクラスの生徒をいじめ抜きそのうえで自殺に追いやりました！」
「そうだ！そうした！」
「人殺しだ！」
こう言うのである。
「そんな人間が社会的地位を満喫しようとしています。この世に正義はあるのでしょうか！」
「こんな奴がいてはない！」
「絶対にない！」
同志達がここでも叫ぶ。
「しかもだ！」
「学校の飼育用の兎まで殺していた！」
「罪のない命まで奪っていた！」
これを聞いていた聴衆と警官達の表情がさらに険しいものになった。いじめだけではないことがここでわかったからである。これは大きかった。
「そうした奴が許されるのか！」
「許すな！」
「悪人を叩き潰せ！」

「そうだ！」
ここで、であった。聴衆の一人が叫んだのだった。
「そんな奴を許すな！」
「こんな会社潰れてしまえ！」
「日本から消えてなくなれ！」
彼等も叫ぶ。それでデモ隊は実質百人を超えたのだった。
「許すな！出て来い筑紫博！」
「極悪人！」
「いじめっ子！」
「兎殺し！」
「皆さん！」
ここでまたしても岩清水がさらなるアジテーションの為に集まっている同志達と聴衆に向いた。そのうえでこう告げたのである。
「暴力はいけません」
「暴力はですか」
「しかしこのビルに隠れている奴がやったことは」
「暴力をすれば同じになります」
問い聞かせる言葉であった。それも理知的にだ。
「ですがそれはいけません。こうした人間と一緒になりたいのですか？」
「いえ、それは」
「なりたくはありません」
「絶対に」
彼等は口々に言う。これで彼等は理性を取り戻した様に見えた。だが実際は岩清水のその術中にかかっていたのである。誰一人としてそれに気付いてはいなかったが。
「そうですね。なりたくはないですよね」
「はい」
「そんな人間以下の奴には」
「それでは暴力は止めましょう」

穏やかな声も出してみせたのであった。

第二十三章

「そうしてです。そのうえで」
「抗議ですね」
「ここは」
「そうです。そしてです」
彼はさらに言うのだった。良識の仮面を被ったうえで。
「この悪辣漢のことを伝えて下さい。こうした輩が出ない様に」
「はい！」
「何があっても！」
彼等は誓い合った。その次の日もデモが行われてここでも連日連夜続いた。そうしてある日の休日。この日は会社は休みだったので筑紫の自宅の前で抗議活動を行っていた。そこには近所の人達も参加して家を完全に囲んでそのうえで攻めていた。
「出て来い悪魔！」
「さっさと謝れ！」
「逃がさないぞ！」
こう叫ぶのであった。家は壁は抗議の文字が何処までも書かれ生ゴミが放り込まれ荒れ放題になっている。家の扉も窓も閉められている。その中からやつれきった筑紫が出て来た。彼等はその筑紫の姿を認めるとそれこそ鬼を見つけた様に騒ぎだした。
「いたぞ、出て来たぞ！」
「こら筑紫！」
「自分の罪を認めるのか！」
だが彼は応えない。空虚な顔で何かをぶつぶつと呟いているだけである。そのうえでこれまた徹底的に荒され落書きや傷跡だらけになった白いスポーツカーに乗り込む。どうやら連日連夜の抗議によって憔悴しきってまともな思考力も判断力も失われているようであった。

彼はそのまま車に乗って何処かに行こうとする。しかし岩清水はそれを逃さなかった。
「皆さん、追いましょう」
「追撃ですね」
「車で」
「そうです、逃がしてはいけません」
こう言うのである。
「幸いワゴン車を何台も用意してます。それで抗議活動をしながら追いましょう」
「ええ、それでは」
「逃がさないぞ筑紫！」
「地獄の果てまでもだ！」
彼等は次々にワゴン車に乗り込みそのうえで筑紫が運転するスポーツカーを追跡する。追跡する中でも拡声器で彼の過去の悪事を周囲に吹聴するのであった。
「皆さん、今私達が追っている筑紫商事の御曹司筑紫博はです」
「かつて修和高校一年の時にいじめでクラスメイトを自殺に追いやった極悪人であり」
「飼育小屋の兎を虐殺しました」
「そんな人間が許されるのでしょうか！」
「筑紫博を許すな！」
そしてまた叫ぶのだった。
「極悪人を許すな！」
「いじめっ子は何処までも追って叩き潰すぞ！」
「逃がしはしないぞ！」
こう叫んで追っていくのであった。やがて筑紫のスポーツカーは彼等の目の前で何故かハンドルを右に大きく切ってしまいコンクリートに正面から激突してしまった。彼は車の中で大きく何度も弾け跳び割れたガラスを全身に浴びた。当然ながら即座に病院に担ぎ込まれた。

しかし病院でもだった。彼等は病院にまで押しかけそのうえで抗議活動を続ける。許可は筑紫の過去の悪事を警察にも病院にも吹聴しておりそれをネットでも広めていた為に脅迫にも近い形となって許された。彼等は筑紫の担ぎ込まれた手術室の前で集まり相変わらず抗議を続けていた。

流石に病院の中なので拡声器は使わない。しかし口々に言うのだった。

「入院しても許さないぞ！」

「出て来い筑紫！」

「絶対に逃がさないからな！」

「いい加減にして下さい！」

「何なんですか貴方達は！」

その彼等の前に泣いて出て来た一組の男女がいた。どちらも初老と思われる歳である。その二人が彼等に対して言ってきたのである。

「うちの息子は死にそうなんですよ！」

「それで病院にまで抗議しに来るんですか！鬼ですか！」

「貴方達は誰ですか？」

岩清水は落ち着いた顔でその二人に対して尋ねた。

「一体」

「筑紫博の父です」

「母です」

二人はこう名乗ってきた。

「それで筑紫商事の社長です」

「副社長です」

「悪辣漢の親だ！」

「親が出て来たぞ！」

だが岩清水達はその二人も取り囲んだ。そのうえで彼等に対する攻撃もはじめたのであった。

「人殺しの親だ！」

「子供に兎を殺すように教えたんだな！」

「屑！」
「犯罪者の親だぞ！」
彼等は二人も糾弾する。そうして何処までも追い詰めていくのであった。

第二十四章

「犯罪者の親！」
「犯罪者の親は犯罪者だ！」
「人殺しだ！」
彼らに対する攻撃も連日連夜に渡った。筑紫の手術室の前で始終抗議を続けそれは手術が終わってからも続いた。それは意識不明の筑紫にも届いたのだろうか。それとも医者や看護士達の手がそれで鈍ったのだろうか。それとも既に手遅れだったのだろうか。筑紫は間も無く死んでしまった。
その葬式は無惨なものだった。葬儀屋も僧侶も誰も来なかった。筑紫の悪評を聞いて誰もが引き受けなかったのだ。会社は倒産した。岩清水達の連日連夜の会社前での抗議活動とネットでのネガティブキャンペーンにより評判が最悪なまでに落ちその結果取引できなくなったからだ。その結果として会社は倒産した。
親族全員からもこれまで交友があった人達からも縁を切られた。当然葬儀をする場所も誰も貸してはくれなかった。筑紫の両親達が残った僅かばかりの財産で葬儀を自分達だけで行った。そうしたまことに無惨な葬儀だった。
いるのはその二人だけだ。彼等も憔悴しきって今にも死にそうな有様である。実際に彼等に残ったものは何一つとしてなかった。
だが静かな葬儀ではなかった。何故かというとだった。
「万歳！万歳！」
「悪辣漢がまた一人地獄に落ちたぞ！」
「皆さん、祝いましょう！悪魔の無様な結末を！」
「これから地獄に落ちるのを！」
「貴方達は・・・・・・」
彼の父親がその葬儀を行っている自宅の前で乾杯を取っている岩清水達の前に来て言ってきた。涙も涸れ尽くしやつれきったその顔

で見据えて言うのだった。
「息子を殺して私達から何もかも奪ってまだやるんですか」
「当然です」
岩清水はその父親に対して平然と告げたのだった。
「それが何か」
「息子は確かに人をいじめました」
涸れもそれは認めた。
「ですがここまで。いびり殺すのですか、貴方達にその権利があるのですか・・・・・・」
「あります」
また平然と答える岩清水だった。
「悪逆非道の輩にはどんな劫罰を与えてもいいのです。そして」
「そして。何なのですか」
「その家族が悪逆非道の輩を育てたなら同罪です。私達は正義を行ったのです」
「私達から全てを奪ったことがですか・・・・・・」
「そうです。ですが御安心下さい」
氷そのものの言葉を告げたのだった。
「もう貴方達には何もしません。筑紫を成敗したのですからね」
「そうだ、悪魔をだ！」
「悪魔を永遠に地獄に落としたのだ！」
同志達がまたここで叫ぶ。
「皆さん、勝利の凱歌をあげましょう！」
「悪がまた一つ滅んだぞ！」
「悪魔は貴方達だ・・・・・・」
父親の声はその勝利の凱歌の中に消えてしまっていた。
「息子は確かに許されないことをした」
それはわかっている。しかしだった。
「だが。その息子をいびり殺し私達から全てを奪った貴方達こそ悪魔だ。正義なんかじゃない・・・・・・」

この言葉は掻き消されるだけであった。そして岩清水は小笠原への陰に陽にの攻撃を執拗に続けていた。今度はであった。

『兎虐殺下手人総務部小笠原祐次』

会社の掲示板にこう書かれた貼り紙が貼られていた。それと共に彼自身と兎達の死体も。その兎達の写真は虐殺されたものではないが死体なのは間違いなかった。その三つと兎の虐殺の状況を克明に書き綴った文章がそこに貼られていたのであった。

社員達はそれを見て。忌々しげに言うのだった。

「あの総務部の新入社員か」

「こんなことまでしていたのかよ」

「最早人間じゃないわね」

「全くよ。もう許せないわ」

こう言ってだった。総務部に殺到してだ。小笠原を探し出して一斉に糾弾するのだった。

「おい屑！」

「兎殺し！」

「いじめだけじゃなかったのね！」

憔悴しきってまさに屍の様になっている彼を取り囲んで糾弾するのだった。

「兎まで殺してたのか！」

「何処まで最悪な奴なのよ！」

「会社から出て行け！」

「そうだそうだ！」

こう言ってだった。彼を連れ出し総務部から蹴り出した。それと共に机や椅子まで廊下に放り出して。そのうえでさらに糾弾するのだった。

「会社から出て行け！」

「二度と来るな！」

「辞めろ！」

次々に罵声を浴びせる。やがてそれは暴力にもなろうとして彼を

追いだした。憔悴しきっていた彼だったが命の危険を察してふらふらと前に歩きだした。しかし階段の手前で。

岩清水は全て読んでいた。階段のところで待ち伏せていたのだ。ふらふらと彷徨う様にして前に逃げる彼の足のところにモップを出してこかせた。すると彼は無惨に階段を転がり落ちた。それにより頭から血を流して腕も歪な方向に曲がってしまった。

第二十五章

「ざま見ろ！」
「天罰よ天罰！」
「これで終わると思うな！」
社員達は階段の下で蹲る彼を見下ろしてせせら笑ってまた罵声を浴びせる。彼はその中で何とか立ち上がって医務室に向かうが。入室を断られた。
「悪いがここに君を治療するものはない」
医務室の医師は温厚な人格者として知られていたが怪我をしてやって来た彼にこう冷たく告げて扉を閉めてしまった。会社の外に出て病院に行こうにも入り口にはデモ隊がいる。とても行けなかった。
「小笠原祐次を許すな！」
「いじめ反対！」
「悪魔を倒せ！」
言うまでもなく岩清水の同志達である。彼はあえて自分の関係者であることを隠してデモをさせていたのである。それもまた小笠原を追い詰めていた。
怪我の痛みに耐え社員達の糾弾から逃れる為に食堂に向かった。しかしそこでもだった。
「この食堂にあんたが座る場所はないよ」
「そうだ、出て行ってくれ」
「二度と来ないでもらいたいね」
食堂のスタッフ達が冷たく告げて彼を追い返す。彼は会社に居場所がなくなってしまった。翌日から彼は会社に来なくなった。来れなくなったのである。
岩清水は残る一人に対する攻撃も続けていた。今度はであった。
「鳥越賢児ですね」
「こいつですか」

「はい、その男です」
岩清水と同志達はある雑貨店の前にいた。そこでまた写真に映っている青年を見て話をしていた。そこには細面で太い眉の青年が映っていた。彼がその鳥越だというのである。
「いじめグループの一人です。そして」
「この店ですね」
「この店にいるんですね」
「そうです」
まさにこの店だというのである。既に店の前には生ゴミが置かれ落書きまみれになっていた。いつもの様な無惨な有様に既になっていた。
「この店の中にいます。家族と一緒に」
「それで家族は」
「誰なんですか？」
「両親と配偶者です」
あえて無機質にお役所仕事的に答えた岩清水であった。
「その三人です」
「そうですか。その三人ですか」
「っていうかもう結婚してるんですね、この鳥越って」
「悪党の癖に」
「その悪党の全てをまた破壊し尽しましょう」
岩清水はここでも同志達に話した。
「今から」
「はい、わかりました」
「じゃあ今から」
そうしてだった。また抗議活動がはじまるのだった。
今回も同じだった。糾弾対象を容赦なく攻撃する。
「出て来い鳥越！」
「今日こそは釈明しろ！」
「兎殺しが！」

「人殺し！」
過去を徹底的に糾弾していく。
「何時までも隠れているつもりか！」
「それならば我々にも用意があるぞ！」
「我々を甘く見るな！」
「悪には容赦しない！」
「いじめをした奴を許すことはない！」
こう言ってだった。店に向かう。店は彼等の連日連夜の抗議活動の影響で客が一人も寄り付かなくなってしまった。バイトの店員達も全部逃げた。その品揃えが豊富なままの雑貨店に進みだった。その店のものをぶちまけその手に持っているバットや鉄パイプで破壊しだしたのであった。
「悪は許すな！」
「全てを破壊しろ！」
「悪人にものは不要だ！」
「止めて下さい！」
ここで店の中から女が出て来た。若い女である。
「貴方達は何なんですか！毎日毎日お店の前でがなり立ててそうして今度はお店の中まで壊して。これはもう立派な犯罪ですよ！」
「犯罪ではない！」
その女の言葉に岩清水が反論した。
「これは裁きだ！」
「そうだ、裁きだ！」
「邪悪ないじめっ子に対する裁きだ！」
「見なさい！」
岩清水はここで店の奥のカウンターを指差した。そこには疲れきった顔の鳥越がいた。彼も抗議の嵐の中で見る影もなくやつれていた。写真では豊かだった髪があちこち抜けて殆ど残っていない。そこまで追い詰められているのがはっきりわかる外見であった。

第二十六章

「この悪人を！いじめで人を自殺に追い込んだ悪人を！」
「主人が悪人だっていうんですか！」
「そうだ、その通りだ！」
岩清水はここぞとばかりに抗議してみせた。
「いじめは悪だ！いじめをする奴は悪人だ！」
「鳥越は悪人だ！」
「悪人は裁け！」
「成敗しろ！」
ここでも同志達が次々に叫ぶ。そうして。
店の中を次々に壊していく。鳥越がうずくまっているカウンターの計算機もだ。そうして彼の前にその壊した店のものをぶちまけるのだった。店の商品まで次々と粉々にしていく。
「悪人のものなぞ壊してしまえ！」
「これは正義の裁きだ！」
「いじめっ子への裁きだ！」
「兎殺しへの天誅だ！」
やはり警察は止めない。デモの警戒にあたっているが何も動かない。彼等のいる警察署は事前にこのデモに関する電話が業務に支障をきたすレベルで殺到しデモに対して何も言えなくなっていたのである。それに鳥越の行動を聞けばどうしても心理的にも動けなくなったのである。
「それにだ。この男はいじめていた相手の食事にこうしてゴミを入れていた」
「目には目を！歯には歯をだ！」
ハムラビ法典の有名な一句まで出される。
「だから我々は今こうしているのだ！」
「義挙だ！」

「そうだ、悪人に天誅を下す義挙だ！」
「その義挙で何もかも壊して」
鳥越の妻はそれでも抗議を続ける。何を言われてもだ。
「お義父さんもお義母さんも心労で倒れて動けなくなって。全ては貴方達のせいなのに」
「悪人の親も罰しろ！」
「悪人を育てた天罰だ！」
「そうだそうだ！」
「当然の報いだ！」
家族についても同罪だという。
「何もかも破壊してやれ！」
「糾弾してやる！」
「許さないぞ！」
「うう・・・・・・」
女も流石に夫を持って店の中に隠れるしかなかった。そうやって難を逃れる。しかしそれで終わりではなく例によってデモ隊は連日連夜抗議活動を続け罵詈雑言を浴びせる。店の経営は完全に崩壊し潰れた。鳥越の両親は親族に引き取られ妻もそれに従った。そして鳥越は。
抗議のデモ隊が去ったある晩のことだった。ふらふらと店の外に出て彷徨った。やがて踏み切りに出てそこで倒れ。何もかもが終わった。
これで彼も死んだ。そうして小笠原もであった。廃墟になった自宅で衰弱死しているのが発見されたのは随分後のことだった。彼もまた死んでしまいこの事件の関係者は全て報いを受けたことになった。
岩清水は自宅においてサイトの更新をしていた。いじめっ子達の末路を書いてそれを天罰であると記したのである。その彼の後ろに高校生程度の少年が来た。それで彼に声をかけてきたのであった。
「健一郎兄ちゃん」

「ああ、健也君か」
見れば彼そっくりの顔と雰囲気である。その彼に顔を向けて笑顔で声を返したのであった。
「来てたんだ」
「いじめサイトの更新してたんだね」
「うん、また悪が報いを受けたよ」
小笠原達の末路の記述を見ながら笑っていた。
「またね」
見れば彼等の写真もある。しかしどれにもバツマークが描かれている。これだけで何があったのか充分察しができるものがあった。
「よかったね、またいじめっ子が滅んだんだ」
「いじめは最低の行為だよ」
岩清水は少年に対して告げた。
「本当にね」
「そうだよね。兄ちゃんの言う通りだよ」
「君は僕の従弟だから言うけれど」
「うん」
その従兄の言葉に頷く彼だった。
「いじめなんてする奴はどんな奴でもどんな手を使っても」
「徹底的に叩き潰せばいいだね」
「そう、容赦をしたらいけないよ」
こうまで話すのだった。
「もうね。腕力がありそうな相手でも陥れて周りを囲んでずっと糾弾すれば参ってしまうからね」
「そして参ったら？」
「さらに攻めるんだ」
彼のやり口をそのまま従弟に教えるのだった。
「絶対にね。許したら駄目だよ」
「絶対に許さない」
「そう、どんな手段を使ってもいいから攻めて攻めて攻め抜いて」

まずはそこを強調する。
「潰すんだよ」
「潰すんだね」
「健也君ならできるよ」
そして従弟に対して告げるのだった。
「絶対にね」
「じゃあ今度転校するけれど」
「その高校でいじめがあったら。いいね」
「わかってるよ。その時は僕も戦うから」
強い決意と共に語る彼だった。
「兄ちゃんみたいにね」
「期待しているよ。じゃあその時にはね」
「徹底的にやるから」
にこりと笑って言い合う二人だった。そしてその時は確実に来る、
こう確信もお互いにしていたのであった。

絶対の正義　　完

２００９・１０・３１

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5145i/

絶対の正義

2010年10月8日13時52分発行